九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 『ツェント・アヴェスター』における賦霊論と彼岸：グスターフ・テオドール・フェヒナーとその系譜（3）

福元，圭太
九州大学大学院言語文化研究院国際文化共生学部門 ： 准教授 ： 現代ドイツ文学・思想

https://doi.org/10.15017/21802

出版情報：言語文化論究. 28, pp.121-134, 2012-03-02. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

# 『ツェント・アヴェスター』における賦霊論と彼岸
## ――グスターフ・テオドール・フェヒナーとその系譜（3）――

福　元　圭　太

九州大学大学院言語文化研究院　言語文化論究　第28号　平成24年2月発行　抜刷

Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
Motooka, Fukuoka, Japan

STUDIES IN LANGUAGES AND CULTURES, No.28, February 2012

# 『ツェント・アヴェスター』における賦霊論と彼岸

## ―グスターフ・テオドール・フェヒナーとその系譜（3）―

福　元　圭　太

## 0．はじめに

前稿[1]では、器質的･心理的な病のために、一時は生死の境をさまよったグスターフ･テオドール･フェヒナーが、4年間にわたる闘病後、奇跡的にその危機を克服したこと、またこの奇跡の体験が契機となり、『ナナ、あるいは植物の魂の生活について』（1848年）が上梓された経緯、および『ナナ』の内容そのものが、詳細に論じられた。『ナナ』でフェヒナーが説いた植物有魂論は、それに続いて1851年に上梓された大著『ツェント・アヴェスター』では、汎神論的な万物賦霊論の様相を呈するようになる。さらに1860年に上梓された、同じく大著である『精神物理学要綱』でフェヒナーは、物質と精神、事物と魂がまるで一つのコインのように表裏一体の関係にあることを、数学的な関数関係で表そうと試みるのである。これら二つの大著で展開されたフェヒナーの世界観は、最終的には晩年の著作『暗黒観に対する光明観』（1879年）において、集約的に述べられることになる。

フェヒナーが最終的に到達した世界観を抽出するにはしたがって、『暗黒観に対する光明観』を参照するのがもっとも適切であると思われる。しかも『ツェント・アヴェスター』および『精神物理学要綱』は、先述したように、ともに大部の書物であり[2]、言語的にも内容的にも非常に晦渋なため、読み進むには読者に相当な忍耐力を要求する。特に『ツェント･アヴェスター』は、『ナナ』と同様、記述が非常に冗漫で、論理的思考と詩的ファンタジーが混交し、議論が過度に徹底的で、倦むということを知らない。また後者『精神物理学要綱』には複雑な微分や積分、対数関数等の計算式が頻出し、それらを理解するには数学ならびに物理学の専門的な知識が要求される[3]。ただ『精神物理学要綱』の中でフェヒナーの世界解釈が文章で述べられた部分については、専門的な数学や物理学の知識がなくても十分に理解可能であり、これについては次稿で取り上げる予定である。また、これら二つの大著、およびそれに先行するいくつかの汎神論的･自然哲学的著作（―『天使の比較解剖学』1825年、『死後の生に関する小冊子』1836年、『ナナ』1848年―）においてフェヒナーが繰り返し述べてきた世界観に関しては、『暗黒観に対する光明観』を分析する際に通観し、詳述する。

本稿の目的は、『ツェント・アヴェスター』とはどのような書物であり、フェヒナーがそこで何を言おうとしているのかを吟味し、その汎神論的な万物賦霊論の様相を浮き彫りにすることによって、『精神物理学要綱』へと続いていく道程を詳らかにすることにある。したがって本稿自体は完結したものではなく、フェヒナーの思想を解き明かす試みの一つの部分を構成する。

## 1．『ツェント・アヴェスター』の成立

1848年、「三月革命」の年に発表された『ナナ、あるいは植物の魂の生活について』は、自然科学が自然哲学を駆逐していく時代に、遅れて到着したロマン主義を髣髴させる「植物有魂論」を主張

した、ユニークなものであった。しかし予想に違わず、この著作に対する反応は ―自然科学者からの手厳しい批判を除いては― ほぼ皆無であった。フェヒナーが暮らしていたザクセンでも、革命の翌年 1849 年からは、反動の時代が始まった。首都ドレースデンでは 49 年にも流血事件があり、大量の逮捕者が出た。また前年の革命を支持した人々に対する追放劇も開始された。1848 年にはいったん約束された「結社･集会･報道の自由」も 49 年には撤廃され、50 年になると廃止されていた「身分制議会」（Standesversammlung）も再召集されるに至った。

フェヒナーが奉職していたライプツィヒ大学では、何名かの教授が 1849 年 5 月のいわゆる「五月蜂起」[4] に関与し、1851 年にはその「政治的傾向」ゆえに 3 名の教授が解雇されたが [5]、これは 1837 年のいわゆる「ゲッティンゲン七教授事件」の再現にほかならなかった。もとより政治的には保守的であったフェヒナーは、ますます政治的なものから遠ざかり、独自の思索を深める日々を過ごしていた。『ツェント・アヴェスター』の末尾には、政治的な文脈ではないにせよ、フェヒナーの世界観の保守性を垣間見ることのできる記述がある。これはこの大著の最後に 12 項目にまとめられた「信仰箇条」（Glaubenssätze）の最後、12 番目の項目にある記述である。

> 私は信じる。存在すべきすべての新しいものは、すでに存在しているものの中からしか成長し得ないことを、存在しつつあるもの、あるいはすでに存在しているものの転覆によってではなく、それらを更に育てること、あるいはそれらを若返らせることによってしか成長し得ないことを。私は信じる。若返りにおいてのみ、古くなった種子の覆いは地に落ちることができ、しかるに古い種子から、より生き生きと、より高く、より広く芽が伸びていくに違いないことを。
> … Ich glaube, daß alles Neue, was bestehen soll, nur erwachsen kann aus dem, was schon bestanden hat, nicht durch den Umsturz, sondern die Fortbildung oder die Verjüngung des Bestehenden oder Bestandenen. Ich glaube, daß in der Verjüngung nur fallen können altgewordene Hüllen, doch frischer, höher, weiter treiben muß der alte Kern. [6]

フェヒナーは『ツェント･アヴェスター』を 1849 年から 50 年にかけて執筆､50 年の 12 月に脱稿し、51 年に 3 巻本で出版した。その総ページ数は、初版の体裁で 1300 を超えている。執筆に当たりフェヒナーは、哲学史・宗教史を渉猟し [7]、キリスト教以前の宗教世界についての知見を深めた。また新旧両聖書を研究して、同時代の福音書批判にも目を通している [8]。フェヒナーはまた、ヤーコプ･ベーメやスピノザ、ライプニッツ、シェリングらから抜書きを作っており、古代から ―自らが 30 年前に熱中していた― ロマン主義に至る、汎神論的な自然哲学の伝統を検証している。銘記しておきたいのは、フェヒナーがスウェーデンの神秘主義者、エマニュエル・スヴェーデンボルクに関心を示していることである。スヴェーデンボルクは 18 世紀の半ばに「物理的基盤をもつ」[9] 思弁的な神秘主義を確立したが､そのような「神秘主義の物理的基盤」がフェヒナーにとって重要であったことは、本稿では指摘するにとどめ [10]、次稿で詳しく取り上げる予定である。他にもフェヒナーは、アンゲールス・ジレージウス、ゲーテ、そして特にリュッケルトからの抜書きを作っている。フェヒナーはリュッケルトの長編詩「ブラーマンの知恵」（Die Weisheit der Brahmanen）の一節を数ページにわたって引用しているが [11]、この詩はリュッケルトの長年にわたるオリエント研究から生まれたものであった。

古代ペルシアの宇宙論やその他の地域の自然宗教にも興味をもったフェヒナーは、本のタイトルもそこから拝借している。『アヴェスター』という名を持つ書物は、もともとは祈祷文や祭祀の規則、伝説的な物語や善悪二元論の神学などが掲載されたゾロアスター教の聖典の名で、長らく口承によって伝えられてきたものが、東イラン語に属するアヴェスター語で書きとめられたもの（4 世紀ごろのササン朝中期）を言う。その最古の一部は古代イランの予言的改革者ゾロアスター（ツァラトゥ

ストラ）自身に由来するものと言われている[12]。この書物は1771年にフランスの東洋学者デュペロン[13]によってフランス語に訳されているが、フェヒナーがこれを知っていた、あるいは読んでいたかどうかは不明である[14]。大学の同僚であるヴァイセ、あるいは同じく同僚であるヘルマン・ブロックハウス[15]を通じてと推測されているが、とにかくフェヒナーは古代ペルシアの世界観を知っており、『ツェント・アヴェスター』の第Ⅰ巻で本のタイトルの由来に関する記述をしている[16]。さらにフェヒナーは、「ツェント・アヴェスター」という言葉の意味を「異論のないわけではない解釈ではあるが」と断ったうえで、「生きた言葉」（lebendiges Wort）[17]と訳し、それとの関連でこの本の目論見を述べているのである。

> 私は本書もまた、生き生きとした、いや自然を生命あるものとなす言葉とならんことを欲する。
> Ich möchte, daß auch diese Schrift ein lebendiges, ja die Natur lebendig machendes Wort sei.

『ツェント・アヴェスター』は全Ⅲ部から構成されている。その第Ⅰ部と第Ⅱ部は「天上の事柄」（Die Dinge des Himmels）について、第Ⅲ部は「彼岸の事柄」（Die Dinge des Jenseits）について費やされる。より詳しく言えば第Ⅰ部および第Ⅱ部は、地球と星辰という、まさに「天空」にある事物について語っていながら、それが同時に「我々人間よりも上位にある天上的なるものについての」（von uns übergeordneten himmlischen Wesen）記述となる。それがさらに、最高存在（das höchste Wesen）、すなわち神の問題を論ずることにもつながっていくのである。また第Ⅲ部では「我々人間自身の将来的な生についての教説」（die Lehre von unserm zukünftigen Leben）[19]が、第Ⅰ部、第Ⅱ部の議論を踏まえて論じられている。

序文においてフェヒナーは、先に引用したように、この本の意図が「自然を生命あるものとなす」という点にあることを明確に述べている。自然は「生き生きとした神的な魂をもっている」（lebendig und göttlich beseelt sei）という見解は古代に発し、素朴な民族の宗教や文明化された人々の自然哲学の中に、つい最近まで生きてきた。しかるにこのような見解は今日すたれつつあり、「自然哲学もその名望を失い」つつある。というのも、一方ではオーソドックスな宗教が、他方では厳密な自然科学の要求が、そのような考え方を排除しており、自然に生命の宿りを見るような万物賦霊論は、それらと「一見矛盾しているように思われている」（in Widerspruch zu stehen [scheinen]）からである。自分がこの本で試みたのは、このような「ほとんど失われつつある見解を再び通用させること」（dieser fast verschollenen Ansicht wieder Geltung zu verschaffen）[20]である、とフェヒナーは言う。

フェヒナーは、植物有魂論を展開した前著『ナナ』は、今回の試みの前奏であったと考えている。『ナナ』における視線は、人間よりも「下方へ向かって」（abwärts gehend）いた。しかし本書ではそれが、神へと至る「上方へと向け」（aufwärts gehend）[21]られることになる。フェヒナーはすなわち、『ナナ』においては、通常、魂をもっていると考えられている人間と動物という存在形態の下位に属する植物の魂を考察したが、今回は人間と動物をも包含している地球そのものや、地球がそのシステムの一部である星辰といった「天上の事物」にも魂があること、いうなればあらゆる自然、世界そのものに「生き生きとした神的な魂」が宿っていることを、つまりは「万物賦霊論」を展開しようとするのである。

『ツェント・アヴェスター』も『ナナ』と同じく、論理的な記述に突然強引なアナロジー、悪く言えば三百代言的こじつけがはさまり、科学とポエジーが混交するかと思えば、スコラ的思弁が延々と続き、さらに数多くの長大な引用が、時として連続して現れる、という構成になっている。その個々のアナロジーや思弁を詳しく検討することは、かえって「木を見て森を見ない」類の誤りを招来しかねない。アーレントも言うように、フェヒナーがたしかにスピノザやシェリング、あるいはヘー

ゲルやヘルバルト、あるいは唯物論的世界観と議論しているように見えても、「この作品はむしろ、魂が宿る自然のいたるところに顕現する汎神論的な神を頂点とした、新たな宗教的世界観の記述に近い」[22]ものであるように思える。我々もフェヒナーの「新たな宗教的世界観」の本質的な部分のみに焦点を当て、本書における個々のアナロジーの妥当性などを細かく検討することはやめてこう[23]。

## 2.「天上の事柄についての教説の概観」

第Ⅰ部と第Ⅱ部「天上の事柄」において展開されるのは、地球と星辰に関するフェヒナー独自の世界観、つまりそれらに魂が宿っているという主張である。第Ⅱ部の末尾でフェヒナーは、それぞれある程度の記述量をもつ10個のテーゼを「教説」(Lehre) としてまとめ、そこまでの記述を総括している。我々はこれら「天上の事柄についての教説の概観」(Ueberblick der Lehre von den Dingen des Himmels) [24]から、いくつか重要なものを見ることにしよう。けだしそれまでの記述は、アナロジーとファンタジー、膨大なノートからの傍証と長大な引用をもって、これらの「教説」について読者を納得させんがためのものだったからである。

さて第1テーゼは、概略以下のようなものである。いわく、「たしかに慣れ親しんだものではないが、それ自身は誠にもっともな地球の観方という意味においては」(Im Sinne der an sich triftigen, wenn schon nicht gewöhnlichen Betrachtungsweise der Erde)、重力をもってその中心へと地球が引きつけているところのすべて、すなわち水、空気、人間、動物、植物は、我々人間の肉体がそうであるように、「その目的と作用において内的に結合した一つのシステム」(ein […] in Zwecken und Wirken innig verknüpftes System) [25]を形成している、云々。フェヒナーは、人間をミクロ・コスモス、地球という天体はそれを拡大したマクロ・コスモスと見ているのである。第2テーゼでは、人間と地球を比べてみれば ―物質性の中に魂が存在するというフェヒナーの物心並行論[26]という見解から見れば―「地球は我々とあらゆる点で一致して」([...] stimmt die Erde mit uns in allen Punkten überein) [27]いること、相違が見られると思われるところも、地球の方が人間よりもより高度な意味において生命を有し、より自立し、より独立した存在であるという理由から来るのであって、それは本質的な相違とは言えないこと、そして地球と人間がアナロジー的には相似形を成すというこの見解を実証しようとしたのが本書の第Ⅲ章であること、が述べられる。事実『ツェント・アヴェスター』第Ⅲ章では、何と48番までナンバーをふって[28]、地球と人間の類似性が記述されている。たとえば12番は次のようなものである。人間の肉体は細胞からできている。各々の細胞には細胞壁があり、中は液体で満たされている。しかるに地球は比較的薄い殻で覆われ、中は液状のもので満たされている。つまり地球は「細胞の最も大きな手本であり、同時にこれらすべての細胞の卵子細胞である」(das größte Vorbild und zugleich die Mutterzelle aller dieser Zellen)[29]。あるいは15番、地球は我々の肉体同様、部分的には外的な、また部分的には内的な運動をしている[30]。あるいは21番。人間には循環作用があり、血液が酸素を臓器に運び、二酸化炭素を排出する。しかるに地球も、海の水が蒸発して雲となり、それが雨となって地に降り注ぎ川となり、また海へと戻って行く[31]、等々。「詩的ファンタジー」としてのみ読むという場合はさておき、これらの記述に ―『ナナ』においてもそうであったように― 我々が少なからず当惑を覚えざるをえないのは、すでに我々が自然科学的世界観にどっぷりと首まで浸かっているからであろうか。

人間のどんな小さな行為もそれを内包している地球になんらかの影響を与え得るとするフェヒナーについてアーレントは、それが今日のエコロジー的な意味で言われているのではなく、「調和的共生」(harmonische Symbiose) [32]の意味においてであると考える。フェヒナーがまだ牧歌的にも「調和的共生」を夢みることができたのは、産業革命の波がドイツ・ザクセンにはまだ十分に届いてい

なかったせいもあろう。フェヒナーはまた、生産力の向上や交通の発達を地球の安定や発展にとって肯定的なものであると考えている。交通手段などはいわば地球の神経組織と考えられているのである[33]。このようなフェヒナーの地球観を、アーレントは「勃興しつつあるリベラル・ブルジョワジーの楽観主義的な進歩概念」([der] optimistische Fortschrittsbegriff des aufstrebenden liberalen Bürgertums）[34]とまとめているが、フェヒナーを取り巻く時代と地域性の限界を考えると、やや手厳しい評価であるように思える。

再び「天上の事柄についての教説の概観」に戻りたい。その第3テーゼでは、「我々人間の個々の肉体がより偉大ないし高度な地球の個別的肉体に属しているように、我々人間の個々の精神もより偉大ないし高度な地球の個別的精神に属している」（Wie unsre Leiber dem größern oder höhern individuellen Leibe der Erde angehören, so unsre Geister dem größern oder höhern individuellen Geiste der Erde）[35]ことが語られる。フェヒナーの場合、肉体と精神は表裏一体と考えられており、肉体が地球の肉体の構成要素であるなら、精神もまた、フェヒナーが言うところの「地球の精神」の構成要素となる。ただし、地球上に生きている個々の人間や動物や植物の精神の総和が、地球の精神と等号で結ばれるのではない。地球の精神は「すべてのものを把握した、統一した、より高度で、意識的な結合」（die alle begreifende, einheitliche, höhere, bewußte Verknüpfung）[36]であるとされるのである。全体が各部分の総和よりも、より高度でより大きなものとなるような計算方法は、有機体的思考法の特徴であるが、フェヒナーの地球精神もまさにそのようなものであり、フェヒナーが地球をすぐれて有機体的に捉えていることがわかる。

第4テーゼでフェヒナーは、地球から他の星辰へと目を向ける。フェヒナーにとって、一つの天体である地球について言えることは「他の星辰たちについてもアナロジー的に当てはまる」（[...] gilt analog von den andern Gestirnen）のである。すなわちすべての星辰たちは「個別に魂を付与されて」（individueller Beseelung teilhaftig）おり、それらが「一つのより高度な、我々を超えた天空の存在たちの国」（ein Reich höherer uns übergeordneter himmlischer Wesen）[37]を形成しているのだと言う。フェヒナーは24歳のときに『天使の比較解剖学』（1825年）という小著をものしているが、そこでの主張と変わらず、『ツェント・アヴェスター』においても、この地球を含めた星辰が賦霊された自然存在であるという観方が「天使信仰」（Engelsglaube）[38]の根本にあると考えている。

第5テーゼでフェヒナーは、地球、そして星辰の精神をも包含する精神として「神の精神」を措定し、続く第6番テーゼは、その「神の精神」が定義される。「神の精神」とは以下のようなものである、とフェヒナーは言う。

> 6）神の精神とは、統一された、きわめて意識的な、真に全知の、つまり世界の全意識を自らの内に担い、したがってすべての個々の被造物の意識を、より高度な関連ときわめて高い意識の統一性のもとに結合したものである[…]。
>
> 6) Der göttliche Geist ist ein einiges, höchst bewußtes, wahrhaft allwissendes, d. i. alles Bewußtsein der Welt in sich tragendes und hiemit auch das Bewußtsein aller Einzelgeschöpfe in höheren Bezügen und höchster Bewußtseinseinheit verknüpfendes Wesen [...].[39]

hochの絶対比較級が一度、絶対最上級が二度使用されることで、神の精神の位階が、ひいては世界の階層的構造が明確になるであろう。またこの文では「意識的」（bewußt）が一度、合成語も含めた「意識」（Bewußtsein）が三度使われている。「意識」に関しては、のちの『精神物理学要綱』においてその意味がより明確にされるのであるが、フェヒナーの場合、術語の区別がしばしば厳密ではなく、ここでも「意識」は精神や魂とほとんど同じ意味で使われていると考えてよい[40]。第7テー

ゼでは、地球と星辰が神のもとに統べられるのであれば、地球上に存在している万物、人間も動物も植物も、またあらゆる事物も、神の精神に内包されているということが語られる。フェヒナーの世界観モデルではすなわち、神が地球を含めた星辰の世界を包摂し、その地球が地上の万物を包摂しており、その万物を神が賦霊しているという、階層的な入れ子構造、いわばあの「マトリューシュカ」のような包摂関係にあると考えられているのである。

このような神の観念は、フェヒナーによれば、キリスト教の神の観念と何ら矛盾しない。第9テーゼでは、神と我々の間にあって仲介機能を果たしているのが他ならぬキリストその人なのであり、地球もまた「最高、最良の関係を築くために」(nach den höchsten und besten Beziehungen) キリストのような「神への仲介者」(einen Vermitteler zu Gott) [41] を求めているとされる。フェヒナーがキリスト教を肯定的に評価するのはここだけではない。先に触れたように『ツェント・アヴェスター』全体の終結部には12条からなる「信仰箇条」が付されているが、そこではキリスト教が、ほとんど賛美されているといってよい [42]。ゾロアスター教の聖典の名をもつ本の掉尾を飾る一節としては、平仄が合わないと言えなくもないが、フェヒナーの意図が、キリスト教以前の宗教や、いわゆる異教をも包含した新たな世界観を打ち立てる点にあったことを思慮すれば、了解可能である。また、フェヒナーがキリスト教にことさら配慮しているのは、19世紀のドイツにおける宗教的な現状を「転覆によって」ではなく、それを「更に育てること」、あるいはそれを「若返らせること」[43] によって更新しようとする試みであると解釈することもできる。

## 3.「彼岸の事柄についての教説の概観」

次に第Ⅲ部の終わりにまとめられている「彼岸の事柄についての教説の概観」(Ueberblick der Lehre von den Dingen des Jenseits) の中から、重要なものを取り上げたい。第Ⅰ部、第Ⅱ部で論じられた「天上の事柄」は、魂の共時的な配置に関する議論であったのに対して、「彼岸の事柄」は魂の配置を縦の時間軸で考察したもの、端的に言えば、「死後の魂の在り処」を考察したものである。

12のテーゼから成る「彼岸の事柄についての教説の概観」の劈頭、第1テーゼでは、死後の精神(=魂) [44] が何処へと向かうのかが語られている。フェヒナーは、人間が死ねばその精神は、それがそこから生まれてきた、あるいはそこから「個体化してきた」(sich heraus individualisirt [sic] hatte)、「より偉大な、ないしはより高度な精神」(in dem größern oder höhern Geiste) [45] へと戻って行くのではなく、そのような「より偉大な、ないしはより高度な精神」との「より明確に意識的な関係に」(in eine heller bewußte Beziehung damit) [46] 入って行く、とする。我々の肉体が死した後に、「より偉大な、ないしはより高度な」層へと移行し、明敏となった精神は、最初は我々の上位にあった地球の、そして神の「精神圏」(Geistessphäre) [47] を捉え始めることになる。

第2テーゼで語られることは、やや複雑である。死後の精神生活は、生前のそれが「直感的生活」(Anschauungsleben) であったとすれば、「想起的生活」(Erinnerungsleben) [48] に変化する、と言うのである。フェヒナーは「直感的生活」をより低い段階、「想起的生活」をより高い段階のものと考えており、死とともに前者から後者への移行が起こるとする。その際、生前の「直感的生活」の「すべての内容とすべての本質はともに」(mit unserm ganzen Gehalt und Wesen) [49] より高度な「想起的生活」の中へともたらされることになる。

続く第3テーゼにおいてフェヒナーは、此岸の精神が送る「直感的生活」の国と彼岸の精神が送る「想起的生活」の国は、より高度な精神においては「ひとつの国」([zu] E i n [e m] Reich [sic]) [50] として結び付くと言う。それは、個々人の精神の中で、直感と想起が結び付いていることからも類推される (analog) であろう —直感は想起によって「より高度に精神化」(eine höhere Begeistung)

され、逆に想起はその基となる直感によって「絶えず規定されていく」(fortbestimmt werden)[51]という関係にある― と言うのである。特に前者の、直感が想起によって「より高度に精神化」されるという関係、換言すれば、本来は現在的一回性という性質を持つ直感が、実は想起に他ならない、という思想は、我々にどうしてもプラトンを思い起こさせるが[52]、事実フェヒナーも「このような理念のなかにプラトンが生き続けている」(Plato lebt noch in den Ideen fort)[53]としている。

死とともに肉体が滅びることはフェヒナーにとって、「これまでそれと結びついていた意識が、かの[彼岸における]継続へと移行する根拠そのものと見なすべき」(selbst als Grund anzusehen [sein], daß das Bewußtsein, das bisher an denselben [(=den Leib)] geknüpft war, auf jene Fortsetzungen desselben übergeht)[54]ことがらとなる(第9テーゼ)。以降、第10テーゼでは、此岸での善行は彼岸で報いられ、悪行は罰せられるであろうという因果応報の思想が、第11テーゼでは、このような考え方がキリスト教と矛盾しないばかりか、キリスト教の「きわめて輝かしい発展のために、新しい、実り多い土壌」(einen neuen fruchtbaren Boden zu lebendigster Entwicklung)[55]を提供するであろうことが述べられる。そしてこれら「彼岸の事柄についての教説の概観」の直後に、先にふれた[56]12条の「信仰箇条」が続いているのである。

## 4.「物心並行論」

以上が『ツェント・アヴェスター』においてフェヒナーが主張した主な論点であった。重要なのは、フェヒナーが直後に執筆した『精神物理学要綱』で明確な形をとる「物心並行論」を、この本の補遺の一つという形で独立させ、論じていることである。フェヒナーの思想体系のすべては、意識、精神、魂、心理的なもの等、どの術語で呼ぼうと、それら感覚的なものは、物質的なものと表裏一体になっている、という確信にかかっていると言えよう。フェヒナーはそのベクトルを逆にして、人間がたとえそれを知覚できないにせよ、すべての物質には、意識、精神、魂がある、と信じるのであり、植物はもとより、地球や星辰に意識、精神、魂を措定し、さらにそのすべてを包括する神の精神を措定しているのである[57]。そして、次稿を先取りして言えば、このような「物心並行論」を自然科学的に根拠付ける試みが『精神物理学要綱』だったのである。

フェヒナーは『ツェント・アヴェスター』で「物体的なものと精神的なものには事実上の並行関係が成立する」(Es besteht ein factischer Parallelismus des Körperlichen und Geistigen)[58]と書き、直後の補遺「数学的心理学の新しい原則に関する覚書」(Kurze Darlegung eines neuen Princips mathematischer Psychologie)[59]でそれを展開している。詳細は次稿に譲るが、フェヒナーの「数学的心理学」は対数関数や積分といった数式が頻出するきわめて難解なもので、すべてを日本語に翻訳し得たとしても、筆者には到底理解できるものではない。その枢要はしかし、精神と肉体、魂と身体、心理的なものと物理的なものが表裏一体である、という「物心並行」の数学的証明にある。フェヒナーが萌芽的に書きとめている「物心並行」の原則は、次の一文である。

> […] 心理的な強度は、それが属している物理的強度の対数であり、物理的強度が幾何級数的関係にある場合、心理的な強度は等差級数的関係で増加する […]。
> [...] die psychische Intensität ist der Logarithmus der zugehörigen physichen Intensität, schreitet in arithmetischem Verhältnisse fort, wenn diese in geometrischem [...] [60]

物理的刺激が幾何級数的(1, 2, 4, 8, 16, ...)に増加する場合、心理的刺激の測定値は等差級数的(1, 2, 3, 4, 5, ...)と増えていく、という関係がある、平たく言えば、心理的刺激の感覚量は、物理的刺激

の強度ではなく、その対数に比例して知覚されると、ということになる。重要なことは、フェヒナーが感覚の量を直接測定することは不可能であると考え、物理的な刺激がどれだけ変化すれば、感覚がその変化を弁別できるか、という最少の弁別閾（丁度可知差）を感覚量の最小単位と考えた点にある。フェヒナーがこのような考え方を最初に書きとめたのが、1850 年 10 月 22 日であったことはつとに知られていたが、その日の日記の記述が 2004 年に発刊されたフェヒナーの日記で読めるようになった。そこには「第一草案」（*Erster Entwurf*）として、次のような記述がある。長くなるが重要な部分なので引用する。

> 生きた力、したがってまた、[…] 所与の瞬間にシステム全体に作用している生命力[61] は、その零の状態からの増加分の総和と考えることができる。[…]
> 生きた力が得る各々の増加量は、それまでに在った生きた力と、一種の関数関係にある。[…] 我々は魂が、この関数関係にある増加量を、それがいかに微小であっても感覚し、それらすべての増加量を加算することを前提としている。また時とともに、総和に増加された量をも含めた全体が、再び総体として感覚されることになる。こうして、[…] 所与の瞬間の魂の状態は、零から始まったすべての増加量の総和であると考えることができる。[…]
> あるシステムの生きた力は個々の部分のそれの総和であり、全システムの生きた力の変化は、個々の部分の生きた力に生じた変化の総和である。
> Die lebendige Kraft und hiemit die [...] eben wirksame Lebenskraft eines Systems in einem gegebenen Moment kann als die Summe der Zuwüchse betrachtet werden, welche vom Nullwerth derselben an statt gefunden haben. [...]
> Jeder Zuwuchs, den die lebendige Kraft erfährt, hat ein Verhältnis zur eben vorhandenen lebendigen Kraft; und [...] wir setzen voraus, daß die Seele diesen verhältnißmäßigen Zuwuchs für jedes Theilchen empfindet, und alle Zuwüchse summirt; und dann wieder die Zuwüchse dieser Summe in der Zeit summirt empfindet, in solcher Weise, daß [...] für den Seelenzustand in einem gegebenen Momente auch die Summe aller Zuwüchse von null an in Betracht kommt. [...]
> Die lebendige Kraft eines Systems ist die Summe der lebendigen Kraft der einzelnen Theile, und die Aenderung der lebendigen Kraft des ganzen Systems ist die Summe der Aenderung, welche die lebendige Kraft der einzelnen Theile erfährt.[62]

そして考慮すべきこととして第一に、「どのような関数において全システムの生きた力が変化するのか」（das Verhältnis in welchem die lebendige Kraft des ganzen Systems sich ändert）、第二に「個々の部分の生きた力は、どのような関数において、生きた力全体の関数の中で変化するのか」（in welchem Verhältniß [sic] die lebendige Kraft jedes einzelnen Theilchens sich in Verhältniß zur ganzen lebendigen Kraft ändert）、そして第三に「個々の部分の生きた力は、自らどの程度変化するのか」（in wie fern die lebendige Kraft jedes einzelnen Theilchens sich für sich ändert）[63] を考察することである、としている。

要点を述べれば、次のようになるであろう。精神、魂、感覚の強度は直接測定できないし、またそこに存在する物質的刺激の絶対量の測定が問題なのではない。重要なのは、もともとそこにあった物質的刺激にどのくらいの差異をもつ刺激が加われば（Zuwuchs）、精神、魂、感覚に変化が生じるのか、なのである。そしてその刺激の増加量と感覚の変化の数学的な関数関係の解明こそが問題なのである[64]。

フェヒナーが上記の「第一草案」を日記に認めた 1850 年 10 月 22 日の朝を、精神物理学者（現在ではふつう「実験心理学者」と呼ぶ場合が多いであろう）たちは、「精神物理学誕生の瞬間」と定め、この日を「フェヒナー記念日」（Fechner-Day）として[65] 祝い、毎年世界各地を持ち回りで会合を開

いている。

さてフェヒナーは日記のこの「第一草案」を、『ツェント・アヴェスター』の中では「補遺」としてのみ展開しているが、雑多で散漫な他の記述のなかに埋もれてしまい、反応はほとんどなかったようである。フェヒナー自身も数学にあまり自信がなかったらしく、ゲッティンゲン大学のヴィルヘルム・ヴェーバー[66]や同僚の数学者・哲学者ドロービッシュ（Moritz Wilhelm *Drobisch* 1802-1896）に批評を乞うたが、両者とも鈍い反応しか返さなかったらしい[67]。

また『ツェント・アヴェスター』全体に関しては、アーレントによれば、哲学者ヘルマン・ロッツェ（Rudolf Hermann *Lotze* 1817-1881）はその冗漫さを嘆き、ヘーゲル派のユーリウス・シャラー（Julius *Schaller* 1810–1868）の評価も否定的であった。シャラーはしかし、『ツェント・アヴェスター』とアレクザンダー・フォン・フンボルトの『コスモス』に親近性があるという指摘もしている。ギーセン大学の哲学教授、モーリッツ・カリエーレ（Moritz *Carrière* 1817-1895）の評価は好意的であったが、アーレントは、カリエーレ自身、汎神論者であり、それがフェヒナーへの肯定的評価に繋がったのであろうとしている[68]。

前著『ナナ』同様、『ツェント・アヴェスター』もまた売れなかった。1000部を刷ったものの、はけたのは200部にも満たなかったらしい。フェヒナーはのちに、『ナナ』を批判した実証主義的植物学者シュライデンとの論争の書、『シュライデン教授と月』の中で、自分に対する批判を引用する形で、戯画的な自画像を描いている。

> […]：「植物の魂、天体の魂、愚か者の魂！自分の持ち場を守っていればよかったものを。彼は快復の途上にあったのに。フェヒナー氏はまだ病気のなにがしかを引きずっているに違いない。」
>
> [...]：„Pflanzenseele, Weltkörperseele, Narrenseele! Wäre er doch bei seinem Leisten geblieben; er war auf besserem Wege; er muß doch von seiner Krankheit etwas zurückgeblieben sein.“ [69]

『ツェント・アヴェスター』におけるフェヒナーの主張は、究極的に切り詰めれば、「万物賦霊論」と「魂の不滅」にあると言うことができるであろう。また、補遺においてのみ展開されていた「物心並行論」は、フェヒナーの次の著書である『精神物理学要綱』において、感覚の強さと物理的刺激の量の関数として、数学的に法則化されることになる。フェヒナーにとって「物心並行論」は、精神と物質が表裏一体の関係にあることの証明であり、それはすなわち魂に物理的基盤があることの証左であった。フェヒナーはそれを逆転させて、物理的な基盤のあるところには必ず魂が存在する、つまり万物は賦霊されていると考えるのである。また、「魂の不滅」の背景には「エネルギー保存則」の発見があると思われるのだが、この点についても次稿でさらに検討を進めたい。

いずれにせよ19世紀後半のドイツにおいて、フェヒナーの『ツェント・アヴェスター』の影響力は、もう一つの『ツェント・アヴェスター』のそれに比べると、ほぼ皆無であったと言ってよい。もう一つの『ツェント・アヴェスター』、ゾロアスター教の聖典という結構の書物、言うまでもなく、ニーチェ[70]の『ツァラトストラかく語りき』（1885年）がそれである。

（続）

## 注

1　福元圭太：「フェヒナーにおけるモデルネの『きしみ』」―グスターフ・テオドール・フェヒナーとその系譜（２）―」「言語文化論究」第26号、九州大学言語文化研究院、平成23年2月発行所収、1-21頁。全文はhttps://qir.kyushu-u.ac.jp/dspace/handle/2324/19178から閲覧およびダウンロー

ド可能である。

[2] 『ツェント・アヴェスター』は初版の体裁で 1300 頁を超え、『精神物理学要綱』は筆者が所有している第 3 版（3. unveränderte Auflage）で 900 頁を超えている。

[3] 数ページにもわたって数式が続いている部分も多く、著者のように高等学校で数学Ⅱまでしか履修していない者にとって『精神物理学要綱』の数式の部分は、解読不能な「ヒエログリフ」であった。筆者がこの部分をまったく理解できていないことは正直に告白しておかなくてはならない。

[4] 1849 年 5 月 3 日にドレースデンで蜂起があり、翌 4 日にはドレースデン臨時政府が樹立されたが、早くも同 9 日には鎮圧された。『世界歴史体系 ドイツ史 2』成瀬治他編、山川出版社、2001 年第 2 刷、年表 56 頁参照。

[5] この中には『ローマ史』で有名な歴史家 Theodor Mommsen（1817-1903）も含まれていた。モムゼンはその後スイスへ亡命しチューリヒ大学で教鞭をとる。そののちブレスラウ大学を経て、1861 年にはベルリン大学へ招聘されている。ライプツィヒ大学を追放された他の 2 名は、Moritz Haupt と Otto Jahn である。

[6] Gustav Theodor Fechner: *Zend-Avesta oder über die Dinge des Himmels und des Jenseits. Vom Standpunkt der Naturbetrachtung*. Zweite Auflage. Besorgt von Kurd Laßwitz. Zweiter Band. Verlag von Leopold Voß. Hamburg und Leipzig 1901. S. 434. 和訳に原文を添えたのは、以下の 3 つの理由による。1. この本があまり簡単には入手できないため、読者の便宜をはかった。2. できれば拙訳の間違いをご指摘願いたい。3. 後にフェヒナー論全体を構成しなおす場合があるかもしれないので、筆者の備忘のため。つまり、衒学的な意図はまったくない。

[7] Vgl. Hans-Jürgen Arendt: *Gustav Theodor Fechner. Ein deutscher Naturwissenschaftler und Philosoph im 19. Jahrhundert*. Peter Lang, Frankfurt am Main. 1999. S. 125.

[8] アーレントによればフェヒナーは、福音書の解釈に関して、大学の同僚ヴァイセ（Christian Hermann *Weiße* 1801-1866）の著作 *Über die Zukunft der evangelischen Kirche. 1847, 1849*[2] を参照したらしい。ヴァイセは後期観念論と神学を融合し、プロテスタントの改革を進めようとしていたという。フェヒナーはまた、ヴァイセにも自分と似た汎神論的世界観や「賦霊された自然」という考え方があると感じていたらしい。Vgl. Hans-Jürgen Arendt: a. a. O., S. 125.

[9] Vgl. Hans-Jürgen Arendt: a. a. O., S. 126

[10] 本稿 4 節「物心並行論」を参照。

[11] Gustav Theodor Fechner: *Zend-Avesta*. a. a. O., Erster Band. S. 303-307. そののちの 3 ページは、今度はジレージウスからの seitenlang な引用が続いている。

[12] 『岩波哲学思想事典』廣松渉他編、2004 年第 3 刷および *Brockhaus Enzyklopädie. 17. völlig neubearbeitete Aufl. des großen Brockhaus*. F. A. Brockhaus. Wiesbaden 1967ff. を参照した。Avesta 自体にはさまざまな意味が推測されているが、「基本テクスト」（Grundtext）、より厳密には「教え」（Unterweisung）を意味するという説が有力である。また Zend あるいは Zand は、古代のアヴェスター語に関する知識が失われたために僧侶が考案した、中期ペルシアの注釈と翻訳を意味する。古くはその意味が不明で、本来は『注釈アヴェスター』を意味する Zend-Avesta が全体として本のタイトルであると、誤って考えられていたようである。フェヒナーの場合もおそらく「ツェント・アヴェスター」を一続きに考えていた節がある。注 17 を付した本文部分を参照。

[13] Abraham Hyacinthe Anquetil-*Duperron*（1731-1805）は 1754 年に兵士としてインドへ赴任、そこに長期間とどまり、チェンナイ（マドラス）の南方にある小都市ポンディシェリー（Pondycherry）で新ペルシア語を学んだ。その後インド中を旅し、ムンバイ（ボンベイ）北部の町ズラート（Surat）でゾロアスター教の一派であるパールシー教（Parsismus）の僧侶の知己を得、『ツェント・ア

ヴェスター』の手写本を入手、当地の高僧にこれを新ペルシア語に訳させたものを口述筆記した。1761 年にヨーロッパへ戻るとオックスフォードで自分の原稿とオックスフォードにある原本を比較検討、翌 62 年にパリへ戻る。『ツェント・アヴェスター』の翻訳は一時はヨーロッパ中に知れ渡ったが、もともと現地の高僧の古代ペルシア語知識が曖昧であったらしく、内容の正確さに関しては疑問視されている。ちなみにその後のドイツ思想・文学にとってデュペロンが重要なのは、ウパニシャッドの部分ラテン語訳の方である（1801 年と 1802 年に 2 巻本で出版された）。この本の熱心な読者の一人にショーペンハウアーがいた。ショーペンハウアーのインド理解がヴァーグナーやトーマス・マンに与えた影響が大であったことは周知のことであろう。

[14] Vgl. Hans-Jürgen Arendt: a. a. O., S. 127.

[15] Weiße については注 8 を参照。Hermann Brockhaus はライプツィヒの高名な出版社ブロックハウス創立者の息子の一人。1848 年以降ライプツィヒ大学古代インド語・文学の正教授。1850 年に *Venidat Sade* というツァラトゥストラの選集を出版した。

[16] Gustav Theodor Fechner: *Zend-Avesta*. a. a. O., Erster Band. S. 266f. ここでフェヒナーはキリスト教の世界創造と比較するために、ペルシアの世界創造神話を紹介している。それは、統一的な原初の基体（Urwesen）である Zervane Akerene が、光の精 Ormuzd と闇の精 Ahriman とに分離する、というものであった。フェヒナーの場合光と闇の対照が随所に見られるが、その集大成が晩年の著作『暗黒観に対する光明観』であることは言を俟たない。

[17] Gustav Theodor Fechner: *Zend-Avesta*. a. a. O., Erster Band. S. VII.

[18] Ebd., S. VII.

[19] Ebd., S. VII.

[20] Ebd., S. VI.

[21] Ebd., S. VI.

[22] Hans-Jürgen Arendt: a. a. O., S. 128.

[23] Berthold Oelze はそのフェヒナーに関するモノグラフィーで Zend-Avesta を非常に詳細に取り上げている。個々の論点が解説されている点では利用価値が高いが、フェヒナーの記述にあまりに忠実なため、かえって焦点がぶれてしまったきらいがある。Vgl. Berthold Oelze: *Gustav Theodor Fechner. Seele und Beseelung*. Waxmann Verlag. New York 1988. *Zend-Avesta* に関しては S. 71-218.

[24] Gustav Theodor Fechner: *Zend-Avesta*. a. a. O., Zweiter Band. S. 179ff.

[25] Ebd., S. 179.

[26] これについては本論の最後にもう一度触れるが、この見解を実証しようとしたのが『精神物理学要綱』である。

[27] Gustav Theodor Fechner: *Zend-Avesta*. a. a. O., Zweiter Band. S. 179f.

[28] ただし使用した版では 16 番目のナンバリングが欠落している。

[29] Gustav Theodor Fechner: *Zend-Avesta*. a. a. O., Erster Band. S. 60.

[30] Ebd., S. 63.

[31] Vgl. Ebd., S. 73f.

[32] Hans-Jürgen Arendt: a. a. O., S.130.

[33] Vgl. Gustav Theodor Fechner: *Zend-Avesta*. a. a. O., Erster Band. S. 132-134; Hans-Jürgen Arendt: a. a. O., S. 130.

[34] Hans-Jürgen Arendt: Ebd., S. 130.

[35] Gustav Theodor Fechner: *Zend-Avesta*. a. a. O., Zweiter Band. S. 180.

[36] Ebd., S. 180.
[37] Ebd., S. 180.
[38] Ebd., S. 181.
[39] Ebd., S. 181.
[40] フェヒナーは次のように書いている。「肉体と精神、あるいは身体と魂、あるいは物質的なものと観念的なもの、あるいは心理的なものと物理的なもの[…]は究極的な基盤と本質において異なっているものではなく、把握や観察の拠って立つ所によってのみ異なっているにすぎない。」Körper und Geist oder Leib und Seele oder Materielles und Ideelles oder Physisches und Psychisches [...] sind nicht im letzten Grund und Wesen, sondern nur nach dem Standpunkt der Auffassung oder Betrachtung verschieden. (Gustav Theodor Fechner: *Zend-Avesta*. a. a. O., Zweiter Band., S. 135.) ここで言われているのは、最後のペアのみを取り上げると「心理的なものと物理的なものは一体である」という「物心並行論」であるが、この文章からはまた、Körper, Leib, Materielles, Physisches は呼び名の違いがあるだけで同じものを指していることが分かる。それはまた Geist, Seele, Ideelles, Psychisches についても同様である。
[41] Gustav Theodor Fechner: *Zend-Avesta*. a. a. O., Zweiter Band. S. 181.
[42] これらの「信仰箇条」のいくつかに、ごく簡単に触れておこう。第 1 条では、全知全能の唯一神の存在を信仰すること、第 2 条では、神が万物の創造主であること、第 3 条ではキリストが神の子であること、第 5 条では、人間の救済への道は、キリスト教の意味における神と隣人への愛以外にはないということ、第 8 条では人間の復活（Auferstehung）と永遠の生命を信じること、そしてその手本がキリストであること、等々である。
[43] 注 6 参照。
[44] 注 40 参照。フェヒナーにおいては精神と魂はほぼ同義語として使用されている。
[45] Gustav Theodor Fechner: *Zend-Avesta*. a. a. O., Zweiter Band. S. 427.
[46] Ebd., S. 427.
[47] Ebd., S. 427.
[48] Ebd., S. 428.
[49] Ebd., S. 428.
[50] Ebd., S. 428. 強調はフェヒナーによる。
[51] Ebd., S. 428.
[52] たとえば「パイドン」には、我々の日常的な感覚的知識は、我々に生得的に備わっているイデアを想起することに他ならない、という思想が述べられる。「そもそもわれわれが、学び知ると呼んでいるはたらきは、本来みずからのものであった、かの知識をふたたび把握することとはならないだろうか。そこでそのことを、想起することというのは、ただしい言い方とはならないだろうか」。プラトン:「パイドン」75E. 引用は『プラトン全集 1』岩波書店、1980 年（第 2 刷）217 頁（松永雄二訳）。
[53] Gustav Theodor Fechner: *Zend-Avesta*. a. a. O., Zweiter Band. S. 428.
[54] Ebd., S. 430.
[55] Ebd., S. 430.
[56] 注 6 および 42 参照。
[57] そうであるとすれば、神の物質性という側面も問題になるはずであるが、フェヒナーはこれには触れていない。
[58] Gustav Theodor Fechner: *Zend-Avesta*. a. a. O., Zweiter Band. S. 163.

[59] Ebd., S. 169ff.

[60] Ebd., S. 170.

[61] Gustav Theodor Fechner: *Tagebücher 1828 bis 1879*. Teilband I. Hrg. von Anneros Meischner-Metge. Bearbeitet von Irene Altmann. Verlag der Sächsischen Akademie der Wissenschaft zu Leipzig, in Kommision bei Franz Steiner Verlag Stuttgart, Stuttgart 2004. S. 411. ここで言われる「生命力」(Lebenskraft) が、哲学者の言うようなそれではなく、「厳密な測定概念」(ein scharfer Massbegriff) であることに、フェヒナーは注意を促している。Ebd., S. 411. 欄外注 621 番。

[62] Ebd., S. 411.

[63] Ebd., S. 411.

[64] 福元がフェヒナーに関する最初の論文で「魂の計測」と名づけたのは、この謂である。福元圭太:「魂の計測に関する試論 ―グスターフ・テオドール・フェヒナーとその系譜(1)―」『かいろす』47 号、「かいろす」の会、2009 年、33-48 頁。全文は https://qir.kyushu-u.ac.jp/dspace/handle/2324/16171 から閲覧およびダウンロード可能である。

[65] Hans-Jürgen Arendt: a. a. O., S. 132. 1984 年にフランスで結成された「国際精神物理学会」の会合は、可能な限り 10 月 22 日に開催されることになっている。"The Society meets annually and when possible on the anniversary of the conception of psychophysics by Gustav-Theodor Fechner which occurred on the morning of October 22nd 1850." (http://www.ispsychophysics.org/fechner-day.html 参照)。当初は 50 ～ 60 人 であったこの会のメンバーも、最近ではその約 2 倍の人数に達しているらしい。なお 2007 年の「フェヒナー・デイ」会合は東京で開催された。

[66] Wilhelm Eduard *Weber* (1804-1891) はドイツの物理学者。兄弟に Ernst Heinrich Weber と Eduard Friedrich Weber がいる。Ernst Heinrich Weber は次稿で言及する「ヴェーバー - フェヒナーの法則」のヴェーバーである。

[67] Hans-Jürgen Arendt: a. a. O., S. 133

[68] Ebd., S. 133.

[69] Gustav Theodor Fechner: *Professor Schleiden und der Mond*. Adolf Gumprecht, Leipzig 1853. S. 19. これについては注 1 に挙げた拙論：福元圭太：「フェヒナーにおけるモデルネの『きしみ』」―グスターフ・テオドール・フェヒナーとその系譜（2）―」を参照。またフェヒナーの「病気」に関しても同論文で詳述した。

[70] ニーチェがフェヒナーの『ツェント・アヴェスター』を知っていた、あるいは読んでいたかどうかは不明であるが、エルツェはその可能性はほとんどないとしている。(NIETZSCHE hat mit großer Sicherheit Fechners „Zend-Avesta“ nie gelesen.) Vgl. Berthold Oelze: a. a. O., S. 82. もっともニーチェは、指導教授であったリッチェルを追って 1865 年 10 月、ボン大学から移ってきてから、バーゼル大学の教授として招聘される 1869 年 2 月までを、ライプツィヒ大学で過ごしており、フェヒナー教授のごく近いところにいたのではあるが。

# Die Allbeseelung und das Jenseits im *Zend-Avesta*

## ― Gustav Theodor Fechner und seine Genealogie (3) ―

Keita FUKUMOTO

In der Vorrede zu seinem voluminösen Werke *Zend-Avesta oder über die Dinge des Himmels und des Jenseits* von 1851 äußert Fechner den Wunsch, dass dieses Werk „ein lebendiges, ja die Natur lebendig machendes Wort“ sein werde. Fechner legt in diesem Werk seine Weltanschauung, d. h., seinen Glauben an die Allbeseelung der Natur dar. Während Fechner im Jahre 1848 in *Nanna* die „Seelenleben der Pflanzen“ beschrieb, beschäftigte er sich diesmal mit der Erde und den Sternen. Mit dem *Zend-Avesta* will er nämlich seiner Weltsicht von der Allbeseelung der Natur, „dieser fast verschollenen Ansicht wieder Geltung“ verschaffen. Nach Fechner ist die Erde ein lebendiges System, das mit dem Menschen als einem organisch-lebendigen System mit guten Gründen (Er zählt sogar 48 Gründe auf!) vergleichbar sei. Denn falls der Mensch eine Seele besitzt, muss auch die Erde beseelt sein, und was für die Erde gilt, muss „analog von den anderen Gestirnen“ gelten. Auf diese Weise werden bei der pantheistischen Weltanschauung Fechners nicht nur Mensch und Tier, sondern auch Pflanzen, Erde und Sterne des göttlichen Geistes teilhaftig und beseelt. Dabei ist interessant, dass sich Fechner nicht im Widerspruch zum christlichen Glauben sieht. Er betrachtet Jesus als „Vermittler zu Gott“, durch den wir mit Gott in die „höchsten und besten Beziehungen“ gebracht werden könnten.

Ein anderes Thema, das Fechner in dieser Schrift erörtert, ist das Weiterleben der menschlichen Seele im Jenseits. Nach dem Tod des Leibes geht die menschliche Seele „in eine heller bewußte Beziehung“ mit dem größeren und höheren Geist der Erde und mit dem Geist Gottes ein. Während das Geistesleben im Diesseits ein „Anschauungsleben“ darstellt, bedeutet das Geistesleben im Jenseits ein „Erinnerungsleben“, in das der ganze Gehalt und das ganze Wesen des diesseitigen Lebens gebracht wird.

Die Schrift *Zend-Avesta*, die offensichtlich keine empirisch-wissenschaftliche ist, ist auch in dem Sinne äußerst wichtig, da Fechner, wenn auch nur am Rande als Zusatz, den Keim seines Gedankens vom „Parallelismus des Körperlichen und Geistigen“ notierte. In seiner nächsten Schrift *Elemente der Psychophysik* von 1860 versuchte er dann diesen Parallelismus mathematisch zu beweisen. Dieses Problem möchte ich in meinem nächsten Aufsatz diskutieren.